

## 口語英語研究 (8)

### 命令や依頼の表現に関して

木戸 充\*・Stuart J. SANDERSON\*\*

\*日本獣医生命科学大学 英語学教室

\*\*Sanderson English School

**要 約** 本稿は命令や依頼を表す英語の口語表現についての考察である。本稿の主題となる表現は (1) 動詞の原形を文頭に置く命令文, (2) 相手への依頼を表す “Will you ~?”/“Would you ~?”/“Can you ~?”/“Could you ~?”, (3) 相手への要求や依頼を伝えるときの前置きとして使われる “Could you do me a favour?”/“May I ask you a favour?”/“Do me a favour.”/“I have a favour to ask you.” など<sup>1)</sup>, (4) 命令や依頼を丁寧に伝えるために使われる please である。本稿の目的は, (1) から (4) に関して, それぞれの意味やニュアンスの相違, それぞれに込められる感情の相違, それぞれが用いられる状況の相違などを明らかにすることである。なお, 木戸・Sanderson (2009 ~ 2015) と同様, 本稿は英語を母語とする者と日本語を母語とする者の長時間にわたるディスカッションを基にして書かれている。

**キーワード**: 命令文, favour, please

日獣生大研報 65, 39-52, 2016.

#### 1. は じ め に

本稿の目的は, 命令や依頼を表す英語の口語表現に関して, 意味やニュアンスの相違, 込められる感情の相違, 用いられる状況の相違などを明らかにすることである。

第2章では動詞の原形を文頭に置く命令文について論じる。命令文は非難・不満・怒りなどの強い感情を込めた命令を表すこともあれば, 冷静で落ち着いた指示を表すこともある。この違いはどのような状況において生じるのだろうか。

第3章では要求や依頼を表す “Will you ~?”/“Would you ~?”/“Can you ~?”/“Could you ~?” について論じる。一般に仮定法の would や could を用いる “Would you ~?” や “Could you ~?” は直説法の will を用いる “Will you ~?” よりも婉曲的で丁寧であると言われるが, “Would you ~?” と “Could you ~?” の間にはどのような違いがあるのだろうか。また, 直説法の will や can を用いる “Will you ~?” と “Can you ~?” の間にはどのような違いがあるだろうか。

第4章では相手への要求や依頼を伝えるとき, その前置きとして用いられる “Could you do me a favour?”/“May I ask you a favour?”/“Do me a favour?”/“I have a favour to ask you.” について論じる。これらはどれも「お願いがあるのですが」などと訳されるが, それぞれのニュアンスやそれぞれが用いられる状況にはどのような違いが

あるのだろうか。

第5章では命令や依頼を丁寧に伝えるために使われる please について論じる。この please は「どうぞ (～してください)」や「どうか (～をお願いします)」などと訳され, 指示や依頼を冷静に伝えることが多いが, 不平・不満・苛立ちなどの強い感情が込められることもある。この違いはどのような状況において生じるのだろうか。

#### 2. 命令文に関して

動詞の原形から始まる文は一般に命令文と呼ばれる。この命令文は相手への要求や指示を率直に伝えるため, 相手への非難・不満・怒りなどの強い感情を込めた命令になることがある。しかし, 同じ命令文が落ち着いた冷静な指示 (非難・不満・怒りなどの強い感情を含まない指示) になることもある。このような強い感情の有無がどのような状況で生じるのかを会話例を見ながら検証する。

次の [ex.1] (1) のように夫婦や親しい友人など対等な者同士の会話では, 相手への要求や依頼を “Could you ~?” などの疑問文で伝えることが多い。このように相手に尋ねる形式で要求や依頼を伝えるのは, 相手に断る機会を与えて一方的に要求や依頼を押しつけることにならないようにするためである。

[ex.1] 夫婦の会話。妻が夫に窓を閉めるように言っているところ。

妻：<sup>(1)</sup> “Ben, *could you* shut the window, *please*? It’s getting a bit colder.”

「ベン、窓を閉めてくれる？少し寒くなってきたわよ」

夫：<sup>(2)</sup> “OK, Cindy.”

「わかったよ、シンディー」

[ex.1] (1) で妻は “Ben, *could you* shut the window, *please*?” と言って夫に窓を閉めてもらうように頼んでいる。これに対して夫は [ex.1] (2) で “OK, Cindy.” と応えて妻からの依頼を受け入れている。

[ex.1] (1) で妻が冷静な気持ちでいるなら命令文を使って “Ben, *shut* the window.” のように夫に言うことは普通考えられない。このような命令文が夫婦の間で使われるのは、危険な事態に陥っているとき、大きな驚きや衝撃を受けたとき、話し手が相手に対して強い不満や非難を持っているときなど、普通とは言えない特別な状況にある場合に限られる。

[ex.2] 夫婦の会話。妻が浮気を疑って夫を責めているところ。

夫：<sup>(1)</sup> “Oh, for God’s sake! I’m not cheating on you.”

「ああ、いいかげんにしてくれ！浮気なんかしてないよ」

妻：<sup>(2)</sup> “Just *answer* my question. Who were you with last night?”

「いいから私の質問に答えなさいよ。昨日の晩は誰といっしょだったの」

[ex.2] は夫婦がいさかいをしているときの会話である。[ex.2] (2) で妻は夫の浮気を疑い, “Just *answer* my question.” という命令文で質問に答えるように夫に迫っている。これは怒りを込めた一方的で強い要求である。

[ex.2] (2) のように命令文に非難・不満・怒りなどの強い感情が込められる場合は次の2つに分けることができる。一つは「友人や夫婦など話し手と対等な立場にいる特定の個人に対して命令文が使われる場合」であり、もう一つは「命令文の内容が話し手の利益を意図している場合」である。

夫婦の会話や友人同士の会話などで話し手と対等な立場にいる特定の個人に対して何かを求めるときには、[ex.1] (1) のように “Could you ~?” などの控えめな言い方をするのが一般的である。したがって、[ex.2] (2) のように妻が夫に命令文で何かを求めた場合には、かなり強い口調で要求を伝えていることになる。また、[ex.2] (2) “Just *answer* my question.” は話し手の一方的な欲求であり、その内容に相手の利益は含まれていない。このように話し

手の利益を意図する要求が強い口調で一方的に伝えられているため、[ex.2] (2) の命令文には非難・不満・怒りなどの強い感情が込められることになる。

以下では「夫婦の会話や友人同士の会話などで話し手と対等な立場にいる特定の個人に対して命令文が使われる場合」や「命令文の内容が話し手の利益を意図している場合」に相当しない会話例をみながら、どのような状況で落ちついた冷静な命令文（非難・不満・怒りなどの強い感情を含まない命令文）が使われるのかを検証する。

[ex.3] 軍隊での会話。上官が部下に指示を出しているところ。

上官：<sup>(1)</sup> “*Report back to me on this matter*, Sergeant. And immediately. Understood?”

「この件については私に報告しなさい、軍曹。急いでね。いいね？」

部下：<sup>(2)</sup> “Yes, sir.”

「はい、承知しました」

[ex.3] (1) で上官は部下に “*Report back to me on this matter*, Sergeant.” という命令文で指示を与えている。これに対して部下は [ex.3] (2) で “Yes, Sir.” と応えている。このように話し手と相手の間に明確な上下関係がある場合には、命令文が使われても落ち着いた冷静な指示になることが多い。

軍隊における上司と部下の会話や学校における教師と生徒の会話などでは、話し手と聞き手の間に明確な上下関係がある。この上下関係を話し手と相手が互いに認めていて、話し手が冷静な気持ちでいるなら、相手もその命令文を冷静に受け取ることになる。したがって、そのような状況では命令文に非難・不満・怒りなどの強い感情が込められることはない<sup>2)</sup>。

次の [ex.4] では話し手と相手の間に明確な上下関係があるわけではないが、命令文で冷静な指示が伝えられている。

[ex.4] テレビの料理番組での会話。テレビカメラに向かって料理家がマッシュルーム・オムレツの作り方を説明しているところ。

料理家：<sup>(1)</sup> “Today, we’re going to show how to cook a mushroom omelet. First, *chop* the mushrooms up into small pieces. Then *put* a little oil into a pan over a medium flame…”

「今日はマッシュルーム・オムレツの作り方ををご紹介します。初めにマッシュルームをみじん切りにしてください。そして、中火のフライパンに油を少々入れて・・・」

[ex.4] (1) で料理家は “First, *chop* the mushrooms up into small pieces. Then *put* a little oil into a pan over a

medium flame…” という命令文を使っている<sup>3)</sup>。このような命令文は一方的な要求になることはなく、非難・不満・怒りなどの強い感情が込められることはない。

[ex.4] (1) のような命令文が冷静な指示になる一つの理由は、相手が特定の個人でないからである。テレビ番組で調理法を説明するとき相手は不特定多数のテレビの視聴者になる。そのような状況では、個人的な会話のように相手からの応答を待つことなく、相手が話し手の指示に従うことを想定した話し方をするようになる。相手からの応答がないまま一方的に話が進行していくため、相手に対する特定の感情が命令文に含まれることはない。

[ex.4] (1) のような命令文が冷静な指示になるもう一つの理由は、話し手の利益が意図されていないからである。調理法の説明によって利益を受けるのは相手であり、調理法の説明自体に話し手の利益は含まれていない。そのため、非難・不満・怒りなどの強い感情が命令文に込められることはない。

[ex.5] 大学生 Jim と大学教授 Dr. Hunt の会話。Jim が質問をするため Dr. Hunt の研究室を訪れたところ。

- Jim : (1) “Hello, Dr. Hunt.”  
「こんにちは、ハント先生」
- Dr. Hunt : (2) “Ah, Jim. How are you?”  
「ああ、ジム。元気ですか」
- Jim : (3) “I’m fine, thank you, sir. And you?”  
「はい、元気です。先生はいかがですか」
- Dr. Hunt : (4) “I’m fine, thanks. What can I do for you?”  
「元気ですよ。どうしましたか」
- Jim : (5) “Well, may I talk to you now? I have some questions.”  
「あのう、今お話してもいいですか。質問があるんです」
- Dr. Hunt : (6) “Sure. Please come in.”  
「いいですよ。中に入ってください」

[ex.5] (6) で大学教授の Dr. Hunt は大学生の Jim に対して “Please come in.” という命令文を使っている。このような命令文に非難・不満・怒りなどの強い感情が含まれることはない。これはこの命令文が「(あなたのために) please (どうか) come in (中に入ってください)」という相手の利益を意図しているためである<sup>4)</sup>。

[ex.4] (1) や [ex.5] (6) に類似した命令文を以下の [ref.1] に挙げる。これらの命令文は相手の利益を意図するため、非難・不満・怒りなどの強い感情は含まれない（ただし、[ref.1] の⑤と⑥は話し手の利益を意図することがあり、その場合には非難・不満・怒りなどの強い感情が含まれる）。

[ref.1] 相手の利益を意図する命令文

① “Touch your toes.” (つま先に触れてください)

体操のインストラクターが屈伸運動の指示を出すとき①のように言うことがある。この場合、“Could you ~?” を使って “Could you touch your toes, please?” のように言うことはない。これは体操の指示が相手の利益を意図するためである。また、体操の指導では丁寧さよりも簡潔さや素早さが優先されるためとも考えられる（体操のインストラクターが屈伸運動の指示を出すとき、please を使って “Please touch your toes.” のように言うことはない。これも丁寧さよりも簡潔さや素早さが優先されるためと考えられる）。

② “Please have a seat.” (どうぞお座りください)

③ “Please have some more coffee.” (コーヒーをもう少しどうぞ)

④ “Please ask me any questions.” (どうぞどんな質問でもしてください)

②は相手に座るように勧めるとき、③は相手にコーヒーを勧めるとき、④は相手に質問するように勧めるときに使われる。いずれも相手の利益を意図するため、“Could you ~?” を使って “Could you have a seat, please?” や “Could you have some coffee, please?” や “Could you ask me any questions, please?” のように言うことはない。

⑤ “Please don’t worry about me.” (どうぞ私のことは心配しないでください)

⑥ “Please calm down.” (どうぞ落ち着いてください)

⑤と⑥は相手の利益を意図することもあれば、話し手の利益を意図することもある。前者の場合には非難・不満・怒りなどの強い感情が含まれることはないが、後者の場合には非難・不満・怒りなどの強い感情が含まれることがある。ちなみに、“Could you ~?” を使って “Could you stop worrying, please?” や “Could you calm down, please?” と言えば、話し手の利益を意図して “for me” (話し手のために) 心配しないでくれますか” や “for me” (話し手のために) 落ち着いてくれますか” と相手に要求していることになる。

ここまで論じてきた命令文の性質を非難・不満・怒りなどの強い感情の有無という観点からまとめると以下の [ref.2] になる。[ref.2] において「感情的」は非難・不満・怒りなどの強い感情を含むこと、「冷静」は非難・不満・怒りなどの強い感情を含まないことを示している。また、○はそれぞれに当てはまる場合があること、一はそれぞれに当てはまらないことを示している

[ref.2] 感情的な命令文と冷静な命令文		
	感情的	冷 静
[ex.2] (2) “Just <i>answer</i> my question.”	○	—
[ex.3] (1) “ <i>Report</i> back to me on this matter, Sergeant.”	○	○
[ex.4] (1) “First, <i>chop</i> the mushrooms up into small pieces.”	—	○
[ex.5] (6) “Please <i>come</i> in.”	—	○
[ref.1] ① “ <i>Touch</i> your toes.”	—	○
[ref.1] ② “Please <i>have</i> a seat.”	—	○
[ref.1] ③ “Please <i>have</i> some more coffee.”	—	○
[ref.1] ④ “Please <i>ask</i> me any questions.”	—	○
[ref.1] ⑤ “Please <i>don’t worry</i> about me.”	○	○
[ref.1] ⑥ “Please <i>calm</i> down.”	○	○

[ex.4] (1) “First, *chop* the mushrooms up into small pieces.”/ [ex.5] (6) “Please *come* in.”/ [ref.1] ① “*Touch* your toes.”/ [ref.1] ② “Please *have* a seat.”/ [ref.1] ③ “Please *have* some more coffee.”/ [ref.1] ④ “Please *ask* me any questions.” は相手の利益を意図する命令文である。このような命令文は落ち着いた冷静な指示になり、非難・不満・怒りなどの強い感情を含むことはない。

[ex.2] (2) “Just *answer* my question.” のように話し手の利益を意図する命令文が対等な立場にいる者に対して使われた場合には、非難・不満・怒りなどの強い感情が込められる。一方、[ex.3] (1) “*Report* back to me on this matter, Sergeant.” のように話し手と相手の間に明確な上下関係がある場合には、話し手の利益を意図する命令文でも非難・不満・怒りなどの強い感情を含まないことがある。

[ref.1] ⑤ “Please *don’t worry* about me.” や [ref.1] ⑥ “Please *calm* down.” のような命令文は、話し手の気持ちや発話の状況次第で、相手の利益を意図することもある。後者の場合には非難・不満・怒りなどの強い感情が込められることがある。

最後に、ここまで論じてきた命令文と異なる性質を持つ慣用的な命令文を検証する。

[ex.6] 友人同士の Jack と Ben の会話。書類を調べている Jack が計算の間違いに気づいたところ。

Jack : (1) “*Wait* a minute!”

「待てよ」

Ben : (2) “What is it, Jack?”

「どうしたの、ジャック」

Jack : (3) “The calculation is wrong. I might have missed something.”

「計算が間違っているんだ。何か見逃したかもしれない」

[ex.6] (1) で Jack は計算の間違いに気づいて “*Wait* a minute!” と言っている。これは形式上 wait という動詞の原形から始まる命令文だが、相手への指示や命令になってはいない。この “*Wait* a minute!” は驚きや感嘆を表す慣用表現であり、間違いに気づいたときや新たな考えを思いついたときに使われる。用いられる状況から考えれば、これは「(話し手が自分自身に対して) a minute (ちょっと) wait (待てよ)」と命令していると解釈することもできる<sup>5)</sup>。

[ex.6] (1) の “*Wait* a minute!” のように相手への要求や指示を意味しない慣用的な命令文を以下の [ref.3] に挙げる。

#### [ref.3] 慣用的な命令文

##### ① “Don’t mention it.” (どういたしまして)

“Thank you very much.” などの感謝のことばへの応答として使われる慣用表現。形式的には don’t から始まる命令文だが、「it (それを) don’t mention (述べるな)」という相手への要求や命令を伝えるものではない。この慣用句の意図は “You don’t need to mention it.” (それ(感謝のことば)を言う必要がない)という話し手の気持ちを伝えることにある。なお、please や疑問文を使って “*Please don’t mention it.*” や “*Couldn’t you mention it?*” のように言うことはない。これは慣用的な定型句であるためだが、要求や指示を相手に求める命令文ではないためと考えることもできる。この点は以下の②も同様。

##### ② “Have a nice day”. (いい一日を送ってください)

相手と別れるときの挨拶として使われる慣用表現。形式としては動詞の原形 have から始まる命令文だが、「a nice day (よい一日を) have (過ごしなさい)」という要求や命令を伝えるものではない。この慣用句の意図は I hope you have a nice day. (あなたがいい一日を送ることを願っています) という思いを相手に伝えることにある。

### 3. 依頼表現の “Will you ~?” / “Would you ~?” / “Can you ~?” / “Could you ~?” に関して

相手に何かをしてもらうように頼むとき “Will you ~?” / “Would you ~?” / “Can you ~?” / “Could you ~?” が使われることがある。これらはどれも「～してくれますか」や「～してもらえますか」などと訳されるが、英語を母語とする者はこれらをどのように使い分けしているのだろうか。

まず、相手への依頼を表す “Will you ~?” / “Would you ~?” / “Can you ~?” / “Could you ~?” のニュアンスを以下の [ref.4] にまとめる。



[ref.4] 相手への依頼を表す “Will you ~?” / “Would you ~?” / “Can you ~?” / “Could you ~?” のニュアンス

① “Will you open the window, please?”

“Will you ~?” は直接的で気軽な依頼表現。①は命令文に付加疑問文を添えた “Open the window, will you?” (窓を開けてくれない?) に近い響きがある。したがって、家族や友人など話し手と親しい関係にある人に対して “Will you ~?” を使えば親しみを込めた気軽な依頼表現になるが、親しい関係にない人に対して “Will you ~?” を使えば状況によって不満・怒り・情熱などの強い感情が込められることもある。

② “Would you open the window, please?”

仮定法 would を用いる “Would you ~?” は「もしかしたら～してくれませんか」のようなニュアンスがあるため、婉曲的で丁寧な依頼表現になる。ただし、would には will (意志) の意味があり、「you (あなたは) would (するつもりがありますか)」のように相手の気持ちを確認めようとする強い響きもある。

③ “Can you open the window, please?”

この “Can you ~?” は本来「you (あなたは) can (できますか)」という意味から「～してくれませんか」という依頼表現として使われるようになったもの。現代的でくだけた響きがある。したがって、“Would you ~?” や “Could you ~?” のような婉曲的な響きはなく、“Will you ~?” ほどの強い響きもない。

④ “Could you open the window, please?”

仮定法 could を用いる “Could you ~?” は “Would you ~?” よりもさらに婉曲的で丁寧な依頼表現。この could の原形 can は「(周囲の状況から考えて) できる」という意味で使われることがある。例えば、喫煙エリアで喫煙ができることを相手に伝えるとき、“You can smoke here.” (ここで煙草を吸うことができます) と言うことがある<sup>6)</sup>。この意味を仮定法過去 could に当てはめて “Could you ~?” を解釈すれば、「(もしかしたら状況から考えて) you (あなたは) could (できますか)」というニュアンスになる。このニュアンスなら周囲の状況からできるかどうかを相手に尋ねていることになり、間接的に要求を相手に伝えていることになる。

[ref.4] の①から④への応答として使われる表現を [ref.5] にまとめる。[ref.5] の①から⑥は相手からの依頼を受け入れる応答になり、[ref.5] の⑦から⑨は相手からの依頼を拒む応答になる。

[ref.5] 依頼表現への応答

① “Sure.”

「確かに」というニュアンス。アメリカ英語で使われることが多いが、現代ではイギリス英語でも使われる。

② “Certainly.”

①と同じ「確かに」というニュアンス。①より丁寧でかたい。

③ “All right.”

「いいですよ」という気軽なニュアンス。積極的な応答である⑤や⑥と比べれば、③は消極的な響きがある。

④ “OK.”

③と同じニュアンス。③より軽い響きがある。

⑤ “With pleasure.”

「pleasure (喜び) with (とともに)」というニュアンス。相手からの依頼を「喜んで」受け入れようとする積極的な響きがある。③や④より丁寧でかたい。

⑥ “Yes, of course.”

「yes (はい) of course (もちろんいいですとも)」というニュアンス。相手からの依頼を “of course” (もちろん) 受け入れるという積極的な応答。

⑦ “Well…”

「ええと」や「あのう」のようなためらいを示す応答。相手からの依頼を受け入れるときには①から⑥のような明確な応答をする習慣があるため、⑦のようなあいまいな応答をすれば、相手からの依頼を受け入れたくない気持ち (あるいは受け入れることができない気持ち) を間接的に示すことになる。暗示的である点では婉曲的でやわらかい。

⑧ “I’m sorry.”

「すみません」という謝罪を伝えることで相手からの依頼を拒むことを間接的に示す応答。

⑨ “Sorry.”

⑧と同じニュアンス。⑧の省略である点では軽い響きがある。

no や not などの否定語によってはっきりと拒絶する気持ちを示せば、直接的できつい応答になる。そのため、“Well…” と言ってから間を置き、引き受けることができないことを表情で伝えることも多い。また、相手からの依頼を一言だけで断れば、直接的で不愛想な話し方になる。そのため、相手の依頼を断るときには、その理由や事情などを添えることが多い。

以下では依頼表現の “Will you ~?” / “Would you ~?” / “Can you ~?” / “Could you ~?” が用いられる会話例を見ながら、それぞれの相違を具体的に検証する。

[ex.7] 朝、小学生の息子が家から小学校に出かけようとしている。その息子を母親が呼びとめているところ。

母親：<sup>(1)</sup> “Tom, are you leaving now?”

「トム、行くのね」

息子：<sup>(2)</sup> “Yes, Mum.”

「うん、お母さん」

母親：(3) “*Will you post this letter on your way to school for me, please?*”  
 「学校に行く途中でこの手紙をポストに入れてくれる？」  
 息子：(4) “*All right.*”  
 「いいよ」

[ex.7] (3) で母親は “*Will you ~?*” を使って手紙をポストに入れてもらうように息子に頼んでいる。これに対して [ex.7] (4) で息子は “*All right.*” と応答している。このように、依頼表現の “*Will you ~?*” は主に家族や友人など親しい関係にある人に気軽に頼みごとをするときに使われる。

[ex.7] (3) で母親が “*Can you ~?*” を使って “*Can you post this letter on your way to school for me, please?*” と言えば、現代的で気軽な頼み方をしていることになる。また、[ex.7] (3) で “*Would you ~?*” や “*Could you ~?*” を使って “*Would you post this letter on your way to school for me, please?*” や “*Could you post this letter on your way to school for me, please?*” と言えば、婉曲的で丁寧な頼み方をしていることになる。

[ex.8] 母親と子供の自宅での会話。玄関のドアベルが鳴ったため、訪問客に対応するように母親が息子に頼んでいるところ。  
 母親：(1) “*Tom, could you answer the door for me, please? I can't leave the kitchen right now.*”  
 「トム、出てくれない？ 今台所から離れられないのよ」  
 息子：(2) “*OK, mum.*”  
 「わかったよ、お母さん」

[ex.8] (1) で母親は息子に “*Tom, could you answer the door for me, please?*” と言っている。この “*Could you ~?*” は婉曲的で丁寧な依頼表現である。このように、家族や友人など親しい関係にある人に何かを頼むときでも、丁寧な話し方をすることが多い<sup>7)</sup>。これは英語社会の習慣によるものだが、自分の要求を相手に受け入れさせるために意図的に丁寧な頼み方をするとも考えることもできる。

[ex.8] (1) のような状況で母親が子供に “*Will you ~?*” を使って “*Tom, will you answer the door for me, please?*” と言った冷静な場合には、[ex.7] (3) と同じような気軽な親しみが込められる。ただし、話し手の気持ちや発話の状況によっては “*Will you ~?*” に強く感情的な響きが込められることもある。これは本来 *will* に「意志」の意味があり、“*Will you ~?*” に「～ you (あなたに) *will* (するつもりがあるのか)」のように相手の意志を確かめているニュアンスがあるためである。

例えば、[ex.8] (1) のような状況では母親が家事に追

われて苛々しながら息子に “*Tom, will you answer the door?*” と言うことも考えられる。この場合には “*Will you ~?*” に強い感情が込められ、命令に近い話し方をしていることになる。一方、[ex.8] (1) のように母親が息子に “*Could you ~?*” を使って “*Tom, could you answer the door for me, please?*” と言った場合には、落ち着いた冷静な話し方をしていることになり、苛立ちのような強い感情が込められることはない。

[ex.9] 客とウェイターのレストランでの会話。ウェイターが水もメニューも持ってこないため、客がウェイターに不満を述べている。  
 客：(1) “*Excuse me.*”  
 「すみません」  
 ウェイター：(2) “*Yes.*”  
 「はい」  
 客：(3) “*Will you bring us the menu? I have already asked twice, but nobody has brought anything, not even a glass of water.*”  
 「メニューを持ってきてくれない？ もう 2 回頼んだけど、何も持ってきてないんだよ、水さえないよ」  
 ウェイター：(4) “*Oh, I'm really sorry, sir. I'll bring you the menu and some water right away.*”  
 「ああ、本当に申し訳ありません、お客様。すぐにメニューと水をお持ちします」

[ex.9] はレストランでの客とウェイターの会話である。客がレストランに入ってしばらくしてもウェイターはメニューと水を持ってこない。そこで気分を害した客はウェイターを呼び止めて “*Will you bring us the menu?*” と言っている。このような状況では “*Will you ~?*” に非難・不満・怒りなどの強い感情が込められる。

レストランで客が初対面のウェイターに何かを頼むときには、婉曲的で丁寧な言い方をするのが一般的である。例えば、レストランで客がウェイターにメニューを持ってきてもらうように頼むときには、“*May I have the menu, please?*” (メニューをお願いしてもいいですか) のように言うことが多い。このように “*May I ~?*” (私は～してもいいですか) を使えば、I (話し手) の行動の許可を相手に求めながら相手への要求を伝えていることになるため、直接 *you* (相手) の行動を求めない婉曲的な言い方をしていることになる。

したがって、レストランで客が初対面のウェイターにメニューを持ってきてもらうように頼むとき、“*Can you ~?*” や “*Will you ~?*” を使って “*Can you bring the menu?*” や “*Will you bring the menu?*” と言えば、気軽すぎる話し方をしていることになる。特に “*Will you ~?*” には感情的で強い響きがあるため、客が初対面のウェイターに “*Will you ~?*” を使って何かを頼めば、ウェイターを見

下して命令しているように聞こえることにもなる。

[ex.10] ある小学校の教室での会話。教師が生徒たちに雑談をやめて静かにするように言っている。  
 教師：<sup>(1)</sup> “Hey, boys and girls, would you be quiet, please? … Be quiet… *Will you* be quiet!”  
 「おい、皆、静かにしてくれないか・・・静かにしなさい・・・静かにしないか！」  
 生徒：<sup>(2)</sup> “…”  
 「・・・」

[ex.10] で最初教師は雑談をしている生徒たちに “Hey, boys and girls, *would you* be quiet, *please*?” と冷静に声をかけている。しかし、生徒たちが静かにしないため、教師は “Be quiet.” という命令文で注意を与えている。それでも、生徒たちが静かにしようとしなないため、教師は強い感情を込めて “*Will you* be quiet!” と怒鳴っている。この “*Will you* be quiet!” は命令文の “Be quiet.” よりも感情的で強い響きがある。これほど強い感情が “Can you ~?” / “Would you ~?” / “Could you ~?” に込められることはない。

なお、この “*Will you* be quiet!” は形式上 will から始まる疑問文だが、相手への命令を表すため文末を下げて発音する。また、一単語毎に区切って “Will・you・be・quiet!” のように発音すれば、いっそう強い感情が込められる。

[ex.11] Eric と Cindy は恋人同士。Eric が Cindy に結婚を申し込んでいるところ。  
 Eric：<sup>(1)</sup> “Cindy, there’s something I want to ask you.”  
 「シンディー、お願いがあるんだ」  
 Cindy：<sup>(2)</sup> “…”  
 「・・・」  
 Eric：<sup>(3)</sup> “*Will you* marry me! I want to share the rest of my life with you.”  
 「結婚してくれないか。今後の人生を君と分かち合いたいんだ」  
 Cindy：<sup>(4)</sup> “Oh, Eric.”  
 「ああ、エリック」

[ex.11] (3) の “*Will you* marry me!” は結婚を申し込むときの決まり文句である。この慣用句には「どうしても結婚を受け入れてもらいたい」という強い情熱が込められている。このような強い情熱が “Can you ~?” / “Would you ~?” / “Could you ~?” に込められることはない。なお、[ex.10] (1) の “*Will you* be quiet!” と同様、[ex.11] (3) の “*Will you* marry me!” は相手の意向を尋ねる質問ではないため語尾を下げて発音する。

[ex.12] テレビ番組で司会者が番組の特別ゲストを紹介しているところ。

司会者：<sup>(1)</sup> “Good evening, everyone. I’m Gill Morris. We have a special guest tonight. *Would you* please welcome the winner of the best actor in a leading role at the 2016 Academy Awards, Mr. Leonardo DiCaprio!”  
 「こんばんは、皆さん。ギル・モリスです。今夜の特別ゲストです。どうか暖かくお迎えください。2016年アカデミー賞主演男優賞受賞者レオナルド・デカプリオさんです」

[ex.12] (1) でテレビ番組の司会者は “*Would you* please welcome the winner of the best actor in a leading part at the 2016 Academy Awards, Mr. Leonardo DiCaprio!” と言ってゲストを紹介している。

假定法過去 would を用いる “Would you ~?” には婉曲的で丁寧な響きがある。この点で [ex.12] (1) の “Would you ~?” には相手（スタジオにいる聴衆）への敬意が込められていると考えられる。一方、would には本来 will（意志）の意味があるため、“Would you ~?” は「you（あなた方）will（するつもりがありますか）」のように相手の気持ちに強く迫る響きもある。この点で [ex.12] (1) の “Would you ~?” には相手（スタジオにいる聴衆）に強く拍手を求める気持ちが込められていると考えられる。

[ex.12] (1) でテレビ番組の司会者が “Would you ~?” の代わりに “Will you ~?” や “Can you ~?” を使うことは普通考えられない。これは直接的で気軽な “Will you ~?” や “Can you ~?” では相手（スタジオにいる聴衆）への敬意が込められないためである。

また、[ex.12] (1) でテレビ番組の司会者が “Would you ~?” の代わりに “Could you ~?” を使うことも普通考えられない。これは婉曲的で遠慮深い “Could you ~?” では相手（スタジオにいる聴衆）に強く拍手を求めることにならないためである<sup>8)</sup>。

依頼表現の “Will you ~?” / “Would you ~?” / “Can you ~?” / “Could you ~?” の相違を [ref.6] にまとめる。[ref.6] において「丁寧」は丁寧で冷静な響きがあること、「親しみ」は家族や友人など親しい関係にある人に対して抱くような親しみや気軽さがあること、「非難」は非難・不満・怒りなど否定的な強い感情があること、「情熱」は求婚するときに抱く情熱など肯定的な強い感情があることを示している。また、[ref.6] において○はそれぞれの気持ちを込めて使う場合があること、―はそれぞれの気持ちを込めて使わないことを示している。



[ref.6] 依頼表現の “Will you ~?” / “Would you ~?” / “Can you ~?” / “Could you ~?” に込められる気持ち				
	丁寧	親しみ	非難	情熱
① “Will you ~?”	—	○	○	○
② “Would you ~?”	○	—	—	—
③ “Can you ~?”	—	○	○	—
④ “Could you ~?”	○	—	—	—

“Will you ~?” は直接的で気軽な依頼表現である。したがって、話し手が落ち着いた気持ちでいる場合には、[ex.7] (3) “Will you post this letter on your way to school for me, please?” のように相手に対する親しみが込められる。一方、発話の状況や話し手の気持ちによっては、[ex.9] (3) “Will you bring the menu?” / [ex.10] (1) “Will you be quiet!” や [ex.11] (3) “Will you marry me!” のように非難・不満・怒りなどの否定的な強い感情や情熱などの肯定的な強い感情が込められることもある。このような点で “Will you ~?” は親しみ、非難、情熱など、感情面では多様な依頼表現であると言えることができる。

仮定法 would を用いる “Would you ~?” は丁寧で冷静な依頼表現であり、“Will you ~?” のように強い感情が込められることはない。ただし、「you (あなたは) would (するつもりがありますか)」のように相手の will (意志) を確かめようとするニュアンスがあるため、[ex.12] (1) “Would you please welcome the winner of the best actor in a leading role at the 2016 Academy Awards, Mr. Leonardo DiCaprio!” のように丁寧でありながらも相手に強く求める響きがある。

“Can you ~?” は現代的で気軽な依頼表現である。例えば、[ex.7] (3) で母親が “Will you ~?” の代わりに “Can you ~?” を使って “Can you post this letter on your way to school for me, please?” と息子に言えば、親しみを込めて気軽に頼んでいることになる。

また、“Can you ~?” は発話の状況や話し手の気持ちによって非難・不満・怒りなどの否定的な強い感情が込められることもある。例えば、[ex.9] (3) のような状況で “Will you ~?” の代わりに “Can you ~?” を使って “Can you bring the menu?” と言えば、初対面のウェイターに気軽な頼み方をしていることになり、非難・不満・怒りなどの強い感情が込められることがある。ただし、“Can you ~?” には “Will you ~?” ほど強い響きはない。例えば、[ex.10] (1) の “Will you be quiet!” や [ex.11] (3) の “Will you marry me!” には怒りや情熱が込められるが、これほどの強い感情が “Can you ~?” に込められることはない。

“Could you ~?” は控えめで遠慮深い依頼表現であり、相手との人間関係に関わりなく丁寧に依頼しようとするときに使われる。この点で “Could you ~?” は “Would you ~?” に近いが、より控えめで遠慮深い響きがある。

そのため、[ex.12] (1) のように司会者が相手（スタジオにいる聴衆）に強く拍手を求めるときには、“Would you ~?” の代わりに “Could you ~?” が使われることはない。

#### 4. “Could you do me a favour?” や “Do me a favour.” などに関して

「お願いしてもいいですか」や「お願いがあるのですが」などと訳される表現に “Could you do me a favour?” / “May I ask you a favour?” / “Do me a favour.” / “I have a favour to ask you.” などがある。これらはどれも依頼や要求を伝えるときの前置きとして使われるが、英語を母語とする者はこれらをどのように使い分けしているのだろうか。

まず、“Could you do me a favour?” / “May I ask you a favour?” / “Do me a favour.” / “I have a favour to ask you.” のニュアンスを次の [ref.7] にまとめる。

[ref.7] “Could you do me a favour?” / “May I ask you a favour?” / “Do me a favour.” / “I have a favour to ask you.” のニュアンス

##### ① “Could you do me a favour?”

「me (私に) a favour (親切な行為を) do (与えて) Could you (くれますか)」というニュアンス。疑問文であるため、拒む機会を相手に与えていることになる。この点では控え目で丁寧。①と同じ意味で “Would you do me a favour?” / “Can you do me a favour?” / “Will you do me a favour?” も使われる。これらの相違は第3章で論じた “Could you ~?” / “Would you ~?” / “Can you ~?” / “Will you ~?” の相違に等しい。

##### ② “May I ask you a favour?”

「you (あなたに) a favour (手助けを) ask (頼んでも) may I (いいですか)」というニュアンス。①と同じように拒む機会を相手に与える疑問文であるため、控え目で丁寧な響きがある。ただし、正式な “May I ~?” (～してもいいですか) を用いるため、かたい響きがある。②と同じ意味で “May I ask you a favour of you?” も使われる。これは文末の “of you” (あなたに) を強調する表現。

##### ③ “Do me a favour.”

「me (私に) a favour (親切な行為を) do (与えてください)」というニュアンス。do から始まる命令文であるため、直接的で強い響きがある。基本的に家族や友人など親しい人に対して使われる。

##### ④ “I have a favour to ask you.”

「you (あなたに) ask (頼みたい) a favour (ことが) I (私に) have (あります)」というニュアンス。話し手の欲求を一方的に伝える肯定文であるため、率直な響きがある。



以下では “Could you do me a favour?” / “May I ask you a favour?” / “Do me a favour.” / “I have a favour to ask you.” が用いられる会話例を見ながら、それぞれの相違を具体的に検証する。

[ex.13] 他人同士の A と B の会話。道に迷った A が通りを歩いている B に声をかけている。

A : (1) “Excuse me, but *could you do me a favour?*”  
「すみませんが、よろしいでしょうか」

B : (2) “Sure. What is it?”  
「いいですよ。何ですか」

A : (3) “I’m completely lost. Could you show me where I am on this map, please?”  
「まったく道に迷ってしまいました。私がどこにいるのか、この地図で教えてくださいませんか」

[ex.13] (1) で道に迷った A は通りかかった他人の B に “Excuse me, but *could you do me a favour?*” と声をかけている。そして, “Sure.” という B の応答を聞いてから A は “I’m completely lost. Could you show me where I am on this map, please?” と B に尋ねている。

このように “Could you do me a favour?” は要求や依頼があることを相手に知らせ、話し手の要求や依頼を受け入れようとする意志が相手にあるかどうかを確かめるときに使われる。相手の気持ちを尊重する質問になっている点で丁寧で遠慮深い響きがある。これは質問の形態をとる “May I ask you a favour?” も同様である。

[ex.14] 母親と息子の朝の会話。家から学校に出かけようとしている息子に母親が声をかけている。

母 : (1) “Tom.”  
「トム」

息子 : (2) “Yes, what is it, Mum?”  
「うん、何、お母さん」

母 : (3) “*Do me a favour and pick up the clothes from the laundry on your way back from school, will you?*”  
「お願いがあるんだけど、学校の帰りにクリーニング店によって洗濯物をとってきてよ、いい？」

息子 : (4) “OK.”  
「いいよ」

母 : (5) “Thanks, Tom.”  
「ありがとう、トム」

[ex.14] (3) で母親は息子に “*Do me a favour and pick up the clothes from the laundry on your way back from school, will you?*” と言って、学校の帰りにクリーニング店に寄るように息子に頼んでいる。このように “Do me a favor and ~, will you?” では命令文 “Do me a

favour” に続けて相手への要求や依頼が伝えられる。話し手の要求を受け入れる気持ちが相手にあるかどうか確かめることなく要求や依頼が一方的に伝えられる点で率直で積極的な響きがある。これは質問の形式をとらない “I have a favour to ask you.” も同様である。

率直で積極的な “Do me a favour.” や “I have a favour to ask you.” は [ex.14] (3) のように主に家族や友人など親しい関係にある人に対して使われる。一方、控えめで丁寧な “Could you do me a favour?” や “May I ask you a favour?” が [ex.13] (1) では親しい関係にない人に対して使われているが、次の [ex.15] (1) のように家族や友人など親しい関係にある人に対して使われることもある。

[ex.15] 親しい友人同士である Jim と Tom の会話。Jim が Tom に声をかけてお金を借りようとしている。

Jim : (1) “Tom, *could you do me a favour?*”  
「トム、お願いがあるんだけど」

Tom : (2) “Well, what is it?”  
「えっ？何だよ」

Jim : (3) “Could you lend me fifty pounds, please? I’ll give it back to you next week. I promise.”  
「100 ドル貸してくれないか。来週には必ず返すよ。約束するよ」

[ex.15] (1) で Jim は Tom に “Tom, *could you do me a favour?*” と声をかけている。この “Could you do me a favour?” は親しい関係にない人に対して使われる控えめで丁寧な表現である。そのような遠慮深い話し方が親しい友人の Tom に対して使われているため、Tom は Jim が何か大きな頼みごとをしようとしているのではないかと疑っている。このときの驚きやためらいは [ref.15] (2) の “Well...” というあいまいな応答にも表れている。

ここまで論じてきた “Could you do me a favour?” / “May I ask you a favour?” / “Do me a favour.” / “I have a favour to ask you.” の相違を次の [ref.8] にまとめる。[ref.8] において「控えめ」は親しい関係にない人と話をするときのような控えめで丁寧な響きがあること、「直接的」は家族や友人など親しい関係にある人と話をするときのような直接的で率直な響きがあることを示している。また、[ref.8] において○はそれぞれの響きがあること、— はそれぞれの響きがないことを示している。

[ref.8] “Could you do me a favour?” / “May I ask you a favour?” / “Do me a favour.” / “I have a favour to ask you.” の相違

	控えめ	直接的
① “Could you do me a favour?”	○	—
② “May I ask you a favour?”	○	—
③ “Do me a favour.”	—	○
④ “I have a favour to ask you.”	—	○

控えめで丁寧な “Could you do me a favour?” や “May I ask you a favour?” は, [ex.13] (1) のように親しい関係にない人だけでなく, 家族や友人など親しい関係にある人に対して使われる。後者の場合には [ex.15] (1) のように相手を警戒させるほどの遠慮深い話し方をしているように聞こえてしまうこともある。

直接的で率直な “Do me a favour.” や “I have a favour to ask you.” は [ex.14] (3) のように主に家族や友人など親しい関係にある人に対して使われる。発話される状況や話し方次第ではあるが, 親しい関係にない人に対していきなり “Do me a favour.” や “I have a favour to ask you.” と声をかければ, 唐突すぎて無礼に聞こえてしまうこともある。

最後に本来の意味から離れた慣用表現として用いられる “Do me a favour!” を検証する。

[ex.16] 親しい友人同士である Jim と Tom の会話。Jim は Tom に明日の試合でブラジルがイングランドに勝つかどうか尋ねている。

Jim : (1) “Do you think Brazil will beat England in tomorrow’s game?”  
「明日の試合はブラジルがイングランドに勝つと思う？」

Tom : (2) “Do me a favour! The England team is the best we have ever had. On top of that, the Brazil aren’t playing so well now.”  
「かんべんしてくれよ。イングランドのチームは今までで最高のチームだよ。まして, 今ブラジルは調子があまりよくないしね」

Jim は [ex.16] (1) で Tom に “Do you think Brazil will beat England in tomorrow’s game?” と言って明日の試合でブラジルがイングランドに勝つかどうか尋ねている。これに対して Tom は [ex.16] (2) で “Do me a favour!” と応えている。この応答には “I don’t think Brazil will beat England in tomorrow’s game.” (明日の試合でブラジルがイングランドに勝つとは思わない) という意見と “Do me a favour! It’s obvious, so don’t ask me such a question!” (お願いだ! わかりきったことなのだから, そんな質問はしないでくれ) という感情が込められて

いる。

このように “Do me a favour!” は “I don’t think so.” (そう思わない) と同じ意味で使われることがある。ただし, この “Do me a favour!” (お願いだ) は “Don’t ask me such a question!” (そんな質問はしないでくれ) という命令を意味するため, “I don’t think so.” よりもずっと感情的で強い響きがある。この慣用句では “Do · me · a favour!” のように一語ずつ区切りながら発音されるとさらに感情的になる。

この “Do me a favour.” の代わりに “Could you do me a favour?” / “May I ask you a favour?” / “I have a favour to ask you.” が使われることはない。これは慣用的な定型句であるためだが, 遠慮深い “Could you do me a favour?” / “May I ask you a favour?” や冷静な “I have a favour to ask you.” では “Don’t ask me such a question!” (そんな質問はしないでくれ) という否定の命令のニュアンスを含むことにならないためとも考えられる。

## 5. 依頼や要求を表す please に関して

相手への要求や依頼を丁寧に伝えようとするとき「どうぞ」や「どうか」という意味で please が使われることがある。この please は落ち着いた冷静な響きを持つことが多いが, 不満や苛立ちなどの強い感情が込められることもある。英語を母語とする者は, この please をどのように使い分けているのだろうか。

まず, please とともに使われる主な表現を次の [ref.9] にまとめる。

[ref.9] please とともに使われる表現

① “Please open the window.” (窓を開けてください)

命令文とともに please が使われることがある。①のように please を文頭に置けば, 丁寧な気持ちが最初から伝わることになる。一方, “Open the window, please.” のように please を文末に置くこともある。この場合には命令文によって強い要求が最初に伝わり, please によって丁寧な気持ちが後から添えられることになる<sup>9)</sup>。

② “Could you pass me the salt, please?” (塩をとっていただけますか)

依頼表現の “Will you ~?” / “Would you ~?” / “Can you ~?” / “Could you ~?” などとともに please が使われることがある。この場合には②のように please を文末に置くことが多い。また, “Could you please pass me the salt?” のように動詞の前に please を置くこともあるが, この場合には “Could you ~?” などの依頼表現の直後でさらに please が使われるため, 相手への要求が重ってより強く感情的になる。

③ “May I have a glass of water, please?” (水を一杯いただけますか)

“May I ~?” (私が～してもいいですか) が please とともに使われることがある。これは “May I ~?” に相手への要求や依頼が含まれる場合。例えば, ③では「a glass of water (水を一杯) have (いただいても) May I (いいですか)」に「水をください」という相手への要求や依頼が含まれている。

④ “Yes, *please*.” (はい, お願いします)

“Yes, *please*.” は相手からの申し出を受け入れることを示す慣用的な応答。例えば, “Would you like some more coffee?” (もう少しコーヒーはいかがですか) という相手からの申し出に対して “Yes, *please*.” (はい, お願いします) と応えることがある。この応答には相手への要求や依頼が含まれる。

⑤ “Coffee, *please*.” (コーヒーをお願いします)

名詞や副詞などとともに please が使われることがある。例えば, レストランで客がコーヒーを注文するとき “Coffee, *please*.” (コーヒーをお願いします) と言うことがある。また, 移動する方向を示すとき “This way, *please*.” (こちらをお願いします), パスポートを見せもらうように相手に求めるとき “Your passport, *please*.” (パスポートをお願いします), 電話でつないでもらいたい内線番号を伝えるとき “Extension number, 555, *please*.” (内線 555 をお願いします) と言うことがある。なお, ④や⑤のような動詞を含まない文では please を文頭に置いて “\*Please coffee.” や “\*Please yes.” のように言うことはしない<sup>10)</sup>。

以下では会話例を見ながら, 落ち着いたある冷静な please と感情的で強い please の相違を具体的に検証する。

[ex.17] 大学での講義の会話。講義の途中で学生の一人が手を挙げた。それを見た教師がその学生に声をかけているところ。

教師: 〈手を挙げている学生を指して〉 (1) “Yes?”

「はい, 何ですか?」

学生: (2) “May I ask a question, *please*?”

「質問してもいいですか」

教師: (3) “Yes, but let me finish this part first.”

「いいですが, まずこの部分を終わりにさせてください」

[ex.17] (2) で学生は教師に “May I ask a question, *please*?” と言っている。この発話には “Please allow me to ask you a question.” (私が質問することを許してください) という内容が含まれている。このように相手への依頼や要求が含まれる場合には, “May I ~?” が please とともに使われることがある。

[ex.17] (2) のように相手への要求が please によって冷静で落ち着いた言い方になることが多いが, 次の [ex.18]

(3), [ex.19] (3), [ex.20] (2) ように please に強い感情が込められることもある。

[ex.18] 夫婦の朝の会話。なかなか目覚めない夫を妻が起こしているところ。

妻: (1) “John, wake up.”

「ジョン, 起きて」

夫: (2) “...”

「・・・」

妻: (3) 〈目を覚まそうとしない夫に〉 “Please wake up. It’s already past seven. You’re going to be late.”

「お願い, 起きてよ。もう7時過ぎよ。遅れるわよ」

[ex.18] (1) で妻は夫に “John, wake up.” (ジョン, 起きて) と言っているが, 夫はなかなか起きようとしなない。そこで妻は please を添えて “Please wake up.” (お願い, 起きてよ) と言っている。発話の状況や話し手の気持ち次第ではあるが, 一般に [ex.18] (3) のような状況では please に一定の感情が込められる。

[ex.19] 子供と母親の会話。子供はアイスクリームを一つ食べ終えたが, もう一つアイスクリームを食べたいと思い, 母親に自分の気持ちを訴えている。

子供: (1) “Can I have another ice cream, Mum?”

「もう一つアイスクリームを食べてもいいかな, お母さん」

母親: (2) “No. You’ve had too much already.”

「だめよ。もう食べすぎよ」

子供: (3) “Oh, *please*, Mum.”

「ねえ, お願い, お母さん」

[ex.19] (1) で子供は “Can I have another ice cream, Mum?” と言っているが, 母親は許それをそうとしない。そこで [ex.19] (3) で子供は感情を込めて “Oh, *please*, Mum.” と言っている。この please には “Oh, *please* give me another ice cream.” (ああ, お願いだからアイスクリームをもう一つください) や “Why don’t you give me another ice cream?” (どうしてアイスクリームをくれないの) という強い願いや強い不満が込められている。

[ex.20] 夫がテレビでサッカーの試合を見ているところ。夫の好きなチームが負けている。

夫: (1) “Fuck! What a useless idiot! I could have scored with my eyes closed!”

「役立たず! なんて大ばか野郎だ! 俺なら目をつぶっていても得点できたぞ」

妻: (2) “John, *please*!”

「ジョン, やめて」

[ex.20] で夫は自分が応援しているチームが得点の機会を逃したため、テレビに向かって罵声を浴びせている。これを聞いた妻が夫に “John, *please!*” と言っている。この *please* には “John, *please* don't speak like that!” (ジョン、どうかそんな話し方をしないで) という強い願いと “Why do you use such bad language?” (なぜそんな悪いことばづかいをするのか) という非難が込められている。この *please* は p-lease [プ・リーズ] のように語尾に強勢を置いて発音されるとより感情的で強い響きが込められる。

*please* に感情的で強い響きが込められるのは、相手にすでに伝わっている要求がもう一度丁寧でありながらも積極的な *please* で表される場合である。例えば、[ex.18] では妻が夫に “John, wake up.” と言った後で “*Please* wake up.” という同じ要求が繰り返されている。また、[ex.19] では子供が母親に “Can I have another ice cream, Mum?” と言って「アイスクリームをもう一つ食べたい」という要求を母親に伝えた後で、 “Oh, *please*, Mum.” と言ってもう一度同じ要求が伝えられている。さらに、[ex.20] では悪いことばを使わないでほしいという気持ちを込めて妻が夫に “John, *please!*” と言っている。ここで夫が妻の要求を理解するのは、悪いことばを使うべきでないという自明なことが *please* の一言で改めて夫に伝えられているためである。

*please* の性質をまとめると次の [ref.10] になる。[ref.10] において「冷静」は落ち着いた冷静な響きがあること、「感情的」は感情的な強い響きがあることを示している。また、○はそれぞれの響きを持つこと、—はそれぞれの響きを持たないことを示している。

[ref.10] 冷静な <i>please</i> と感情的な <i>please</i>		
	冷静	感情的
[ex.1] (1) “Ben, could you shut the window, <i>please?</i> ”	○	—
[ex.5] (6) “ <i>Please</i> come in”	○	—
[ex.7] (3) “Will you post this letter on your way to school for me, <i>please?</i> ”	○	—
[ex.8] (1) “Tom, could you answer the door for me, <i>please?</i> ”	○	—
[ex.17] (2) “May I ask a question, <i>please?</i> ”	○	—
[ex.18] (3) “ <i>Please</i> wake up.”	—	○
[ex.19] (3) “Oh, <i>please</i> , Mum.”	—	○
[ex.20] (2) “John, <i>please!</i> ”	—	○

基本的に *please* は依頼や要求を丁寧に伝えるために使われる。したがって、[ex.1] (1), [ex.5] (6), [ex.7] (3), [ex.8] (1), [ex.17] (2) のように落ち着いた冷静な響きを持つことが多い。しかし、[ex.18] (3), [ex.19] (3), [ex.20] (2) のように強く感情的な響きを持つこともある。これは

すでに相手が知っている要求や依頼を *please* でもう一度相手に伝える場合である。

相手への要求を具体的に説明しない点、丁寧な言い方でありながら感情的で強い響きがある点、相手への不満や批判を含む点で、[ex.19] (3) や [ex.20] (2) の *please* は [ex.16] (2) の “Do me a favour!” に似ている。

しかし、[ex.19] (3) や [ex.20] (2) で *please* の代わりに “Do me a favour!” が使われることはない。これは [ex.16] (2) で用いられている慣用的な “Do me a favour!” は “I don't think so” という意味を持つ応答になるが、そのような応答が [ex.19] (3) や [ex.20] (2) で求められているわけではないためである。

一方、[ex.16] (2) では Tom が “Oh, do me a favour!” という代わりに “Oh, *please!*” と言うことも考えられる。この場合には「(その質問の答えは明らかなのだから) Please do not ask me such a question. (そんな質問はしないでください)」という内容が言外に示され、 “Do me a favour!” に似た意味の応答になる。ただし、[ex.16] (2) で “Oh, do me a favour!” と言う場合には話し手が微笑んでいることもありうるが、[ex.16] (2) で “Oh, *please!*” と言う場合には話し手が微笑んでいることは普通考えられない。これは “Oh, *please!*” に “Do me a favour!” にないほどの深刻な響きがあるためである。

## 注 釈

- 1) 一般に、イギリス英語では *favour* と綴り、アメリカ英語では *favor* と綴る。本稿では一般にイギリス英語で使われる綴りで記述する。
- 2) 無論、話し手と相手の間に明確な上下関係がある場合でも、話し手の気持ちや発話の状況次第で命令文に非難・不満・怒りなどの強い感情が含まれることもある。例えば、提出すべき報告書を部下が提出していないことがわかったときなら、[ex.3] (1) のような状況で上官が怒りを込めて部下に “*Report* back to me on this matter, Sergeant.” と言うことも考えられる。
- 3) 一般に命令文に *please* を添えればより丁寧になるが、[ex.4] (1) では料理家が *please* を添えて “First, *please chop* the mushrooms up into small pieces. Then *please put* a little oil into a pan over a medium flame…” のように言うことは普通考えられない。これは、聞き手が話し手の指示に従うことを前提とする会話では、丁寧さよりも簡潔さや素早さが優先されるためだと考えられる。[ref.1] ① “Touch your toes.” を参照。
- 4) [ex.5] (6) のような状況では Dr. Hunt が “Could you ~?” や “Would you ~?” などを使って “Could you come in, *please?*” や “Could you come in, *please?*” のように言うことは普通考えられない。これは依頼表現の “Could you ~?” や “Would you ~?” などには「(私のために) どうか～してくれませんか



か」という話し手の利益を意図するニュアンスがあるが, [ex.5] (6) の発話には「(あなたのために) come in (入ってください)」という相手の利益を意図するニュアンスがあるためである。したがって, [ex.5] (6) でも話し手の都合から研究室の中に入って座ってしばらく待ってもらうように頼む場合なら, “*Could you come in and wait here, please? I’ll be back in a minute.*” (中に入って待ってもらえますか。すぐに戻ってきますから) のように言うことはありうる。

- 5) 「ちょっと待ってください」という意味で待つという行動を相手に求めるときに “Wait a minute.” と言うこともある。この場合には “Wait a minute.” が相手への要求を表す一般の命令文になる。
- 6) “You *can* smoke here.” (ここで煙草を吸うことができます) の *can* は「～してよい」とも訳され、一般に「許可」を表すと言われる。ちなみに、*may* も「～してよい」という「許可」を表すが、“You *may* ～” では「(自分の権限で) you (あなたが～することを) *may* (許す)」というニュアンスになる。例えば、軍隊なら上官が部下に “You *may* leave now.” (もう下がってよろしい) と言うもありうる。この場合には上官の権限を使って部下に退出の許可を与えていることになる。
- 7) [ex.7] (3) “Will you post this letter on your way to school *for me, please?*” や [ex.8] (1) “Tom, *could you* answer the door *for me, please?*” のように、依頼表現の “Will you ～?” / “Would you ～?” / “Can you ～?” / “Could you ～?” は “for me” や *please* とともにが使われることが多い。この “for me” には「私のために (わざわざ申し訳ないが)」という遠慮深い気持ち, “*please*” には「どうかお願いしたい」という丁寧な気持ちが込められている。
- 8) [ex.12] (1) では *please* と命令文を使って *Please welcome* the winner of the best actor in a leading part at the 2016 Academy Awards, Mr. Leonardo DiCaprio! のように言うことはある。この場合には *please* に相手への敬意が込められ、命令文に拍手を強く求める気持ちが込められる。
- 9) *please* とともに使われる表現や *please* が置かれる文中の位置する詳細は小西友七 (1989). pp. 1393-1405. を参照。

- 10) *Please give me a cup of coffee.* のような *please* から始まる命令文では、*please* の直後に *give* などの動詞の原形を置く習慣がある。そのため、*please* の直後に *coffee* などの名詞を置いて “Please coffee” のように言うと不自然に感じられると思われる。

## 参 考 文 献

- 荒木一雄・安井稔 監修 (1992) 『現代英文法辞典』(三省堂)
- 石橋幸太郎・広瀬泰三・伊藤健三・高梨健吉・鳥居次好・渡辺藤一 監修 (1990) 『英語語法大辞典』(大修館)
- 大塚高信 監修 (1970) 『新英文法辞典』(三省堂)
- 大塚高信・岩崎民平・中島文雄 監修 (1976) 『英文法シリーズ』(研究社)
- 小西友七 監修 (1989) 『基本形容詞副詞辞典』(研究社)
- 木戸充・SANDERSON, S.J. (2009) 『口語英語研究 (1): 人名及び人名相当語句に関して』(日本獣医生命科学大学研究報告, 58, pp. 142-154)
- 木戸充・SANDERSON, S. J. (2010) 『口語英語研究 (2): 人と会ったときの挨拶表現に関して』(日本獣医生命科学大学研究報告, 59, pp. 113-124)
- 木戸充・SANDERSON, S.J. (2011) 『口語英語研究 (3): 人名及び人名相当語句に関して』(日本獣医生命科学大学研究報告, 60, pp. 105-114)
- 木戸充・SANDERSON, S.J. (2012) 『口語英語研究 (4): Christmas や New Year に関わる表現及び Nice to meet you や Nice meeting you などの挨拶表現に関して』(日本獣医生命科学大学研究報告, 61, pp. 71-86)
- 木戸充・SANDERSON, S.J. (2013) 『口語英語研究 (5): 人と別れるときの挨拶表現句に関して』(日本獣医生命科学大学研究報告, 62, pp. 106-119)
- 木戸充・SANDERSON, S.J. (2014) 『口語英語研究 (6): 謝罪の表現に関して』(日本獣医生命科学大学研究報告, 63, pp. 89-97)
- 木戸充・SANDERSON, S.J. (2015) 『口語英語研究 (7): 欲求・期待・願望の表現に関して』(日本獣医生命科学大学研究報告, 64, pp. 63-75)
- Collins Cobuild English Language Dictionary (1987). Collins Sons & Co Ltd
- Longman Dictionary of American English (1983). Pearson Education Limited
- HORNBY, A.S. *Oxford Advanced Learner's Dictionary* (2000). Oxford University Press

## Study of Colloquial English (8) : Concerning Expressions Showing Orders and Requests

Mitsuru KIDO\* and Stuart J. SANDERSON\*\*

\*Laboratory of the English Language, Nippon Veterinary and Life Science University

\*\*Sanderson English School

### Abstract

This article is a study on the following four kinds of colloquial English expressions: (1) imperative sentences in which the imperative mood is used to show orders, (2) interrogative sentences used to show requests, such as “Will you…?” / “Would you…?” / “Can you…?” / “Could you…?”, (3) idioms used before expressing requests, such as “Could you do me a favour?” / “May I ask you a favour?” / “Do me a favour.” / “I have a favour to ask you.”, and (4) “please” used in (1), (2) and so on to make orders and requests sound polite. As in *Studies of Colloquial English (1) to (7)*, this study, based on discussions between native speakers of English and Japanese, analyzes what differences there are between them concerning meaning or nuance and in what situations those colloquial expressions above are used.

**Key words** : imperative, favour, please

Bull. Nippon Vet. Life Sci. Univ., **65**, 39-52, 2016.